

氏名	坪 井 雅 弘
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1441 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和58年12月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学 位 論 文 題 目	Immunocytochemical localization of T antigen in hamster brain tumor cells induced with BK virus BK ウイルス誘発ハムスター脳腫瘍細胞におけるT抗原の免疫 細胞化学的局在証明
論 文 審 査 委 員	教授 小川勝士 教授 折田薫三 教授 矢部芳郎

学位論文内容の要旨

ヒトパポバウイルスの発癌遺伝子産物と考えられるT抗原の作用の一端を検索する目的で、T抗原の局在を光学顕微鏡及び電子顕微鏡レベルで検討し、以下の結果を得た。

BK ウイルスT抗原（BKV-T）とSV 40-T抗原との間には交叉反応性があり、Vn 12ハムスター脳腫瘍細胞とSV 40誘発皮下腫瘍細胞ともinterphaseにおいては、核小体、核膜を除く核質内にのみT抗原の陽性反応がみられ、あたかもクロマチンに親和性を有するかの如く局在していた。しかしmetaphaseではT抗原陽性反応は原形質内に分布し、クロモゾームには陽性反応はみられず、telophaseになると再び核内にT抗原陽性反応が出現するのが観察された。

このようなT抗原の局在の変化についての細胞生物学的意義は不明であるが、BK virus-transformed cellの分裂増殖過程で、BKV-T抗原がクロモゾームから離れることが必須であるのかも知れない。

論文審査の結果の要旨

本研究はBK ウイルス誘発ハムスター脳腫瘍由来のVn 12細胞について細胞回転の各期におけるT抗原の局在と移動を光顕・電顕レベルで免疫細胞学的に追究し、interphaseでは核小体と核膜を除く核質内に、metaphaseでは原形質内に、telophaseでは再び核内に出現することをみたものであるが、ウイルス発癌における遺伝子のT抗原産

生機序を知るのに重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。